株式会社小田島組(位置コミ)

県全域の道路補修案件の迅速かつ正確な状況把握と判断を実現した

「位置コミ for kintone」



面積 15,275 ㎡、北海道に次いで二番目に広い岩手県。 岩手県では現在 15 の土木センターが主管事務所となり、 土木業者とともに県全域の工事案件を処理している。

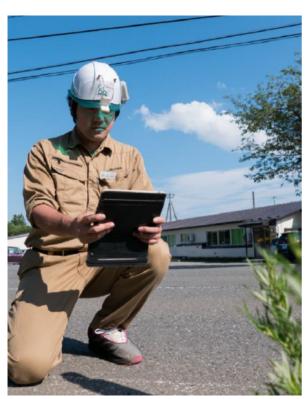
今でこそ、県の土木業界の IT 化は進んできたものの、 今から 10 数年前の 2000 年初めの道路補修工事といえ ば、デジタルカメラの普及も進んでいない、アナログな 時代。例えば、カーブミラーの破損の連絡がセンターに あれば、依頼を受けた業者(あるいはセンター職員)が 現場まで出向いて写真を撮り、現像に出して、書類に貼 って工事申請を行い、工事指示を受けた業者が工事実 施、施工中・施工後の写真を貼付して完了報告書を提出 する、といった非常に煩雑なフローが発生していた。特 に建物が密集する都会と違い、目印となる建物が周辺 にない場合が多く、場所の特定が難しく、エリアも広域 であるため、とにかく時間がかかっていたそうだ。



そんな問題を解決するために、IT 化にいち早く取り組んだのが、株式会社小田島組の小田島直樹代表取締役社長。以前から写真に位置情報を付けられれば、撮影場所が特定できて良いだろうというアイディアはあり、2004年に道路維持工事支援システム『位置コミ』をリリース。その後3、4年掛けて、県内のすべての土木センター事務所(当時は13拠点)に『位置コミ』が導入された。県の担当職員が携帯電話で写真を撮り、『位置コミ』に入力すれば、写真からまず修理箇所がわかり、位置情報も瞬時にわかるという仕組みだ。この『位置コミ』は、簡単な補修工事ならば、わずか3時間ぐらいで完了するというほどの劇的な効率化をもたらした。



こうした効果もあって順調に『位置コミ』の利用が進んではいたものの、開発元である小田島組にとって、運用管理に関する負担はけっして小さなものではなかったという。特にスマートフォンやタブレットなど、多種多様なデバイスの登場や、OSのアップデートなどの変化が起こるたびに、どの機種では使えてどの機種では使えない、などの検証を全て小田島組の社内で行っていたそうだ。しかしデバイスの進化のスピードは年々加速し、本業である建築土木業の傍らでそのすべてを検証し、対応していくことは"不可能"だと判断した。そうした中、同社が注目したのがクラウドサービスであるkintone だったという。



kintone なら最新の OS 対応は全てクラウドサービスの提供元であるサイボウズ側が検証を実施しているほか、スマートフォンやタブレットも標準で対応しているため、小田島組の検証コストはほぼ無くなった。また、以前は『位置コミ』に不具合が発生した際に、契約先のサーバー会社に連絡して障害がないかどうか確認をし、小田島組の担当者が直接ユーザー対応を行っていた。しかし現在はクラウドベースにしたことで、こうした作業は全てサイボウズに任せられるようになったという。

新たなデバイスや OS の検証、不具合対応な ど、 今まで大きなコストを掛けていた部分が全て解消され、本業である建築土木業の仕事に専念できるように なった。

企業概要



位置コミ for kintone ichi-comi for kintone

株式会社小田島組(位置コミ)

岩手県の土木中心の建設会社で社員数は 100人。IT を積極的に活用し、すべての現 場をテレビ会議で繋いで情報共有を行い、 職場環境の改善を進めている。

若い社員の成長と仕事と生活の両立を第一に考え、現場依存ではない全社的な技能向上と残業撲滅に努め、県の評点ランキングで常に上位を独占している。